

五つのパンと二匹の魚

ヨハネの福音書 6章 1-15節

はじめに

今日の聖書箇所には、イエス様が五つのパンと二匹の魚を用いて、五千人の人々を十分に食べさせたという不思議な奇跡が書かれています。この奇跡は、マタイ、マルコ、ルカのそれぞれの福音書にも書かれている非常に有名な出来事です。

この出来事は「ガリラヤの湖」、別名を「ティベリアの湖」と呼ばれる湖の「向こう岸」で起こりました。5章の舞台は「エルサレム」でしたが、6章に入ると、その舞台は「ガリラヤ」に移ります。4節に「ユダヤ人の祭りである過越が近づいた」とありますから、時期は春頃だと考えられます。10節にも「草がたくさんあった」とありますので、植物が生い茂る気持ちの良い春の季節に、イエス様と弟子たちは、ガリラヤ湖の向こう岸の山に登られ、そこで座っておられたのです。

1. 弟子たちを試すイエス

するとそこに、「大勢の群衆」がやって来たのです。10節を見ると、男だけでも、「その数はおおよそ五千人であった」とあります。女性や子どもも含めるともっと多かったでしょう。イエス様は、その大勢の群衆がご自分の方に来るのを見て、ピリポにこう言われました。「どこからパンを買って来て、この人たちに食べさせようか」。イエス様は、五千人もの群衆にパンを食べさせようとしています。他の福音書を見ると、弟子たちは群衆の解散をイエス様に提案しています。群衆を解散させて、それぞれでパンを買ってもらうことを提案しているのです。しかしイエス様は、群衆にパンを食べさせようとしているのです。

ではイエス様は、どのように五千人もの群衆にパンを食べさせるのでしょうか。イエス様はピリポに、どこでパンを買ったらよいかと尋ねます。しかしイエス様はここで、本当にパンを買おうとしたのではなく、ピリポを試すためにこう言われたと6節にあります。ピリポはここでイエス様に試されたのです。おそらくピリポ一人が試されたのではなく、弟子たち全員がここでイエス様に試されたのだと思います。イエス様は、弟子たちの何を試されたのでしょうか。それは、「信仰」だと思います。イエス様または神様が私たち人間を試される時、試練を与える時、いつも問われるのは「信仰」です。「試される」というのは、「試験する」ということです。学校の「試験」では、「学力」が問われます。運転免許の自動車学校の「試験」では、「学力」と共に「技術」が問われます。しかしイエス様の「試験」では、「信仰」が問われるのです。どれだけイエス様を信頼するかが問われるのです。

ピリポは、イエス様にこう答えます。「一人ひとりが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません」。ピリポは金銭の計算をします。五千人の群衆にパンを食べさせるには、最

低でも「二百デナリ」のお金が必要だと言います。「一デナリ」は、当時の労働者の一日分の給料です。仮にそれが一万円だとすると、「二百デナリ」は二百万円になります。五千人の群衆にパンを食べさせるには、最低でも二百万円が必要になります。しかもその二百万円では、五千人の群衆を十分に食べさせることはできない、少しずつしか食べさせることができないのです。ピリポはここで、五千人の群衆にパンを食べさせるには、どれだけの大金が必要かを示して、パンを買うことは不可能だとイエス様に言おうとしたのだと思います。

すると「シモン・ペテロの兄弟アンデレ」は、別の方法を考えます。買うのが不可能なら、群衆の中から集めてそれをみんなで少しずつ分け合ったらどうかと考えます。しかしアンデレが集めることができたのは、少年が持っていた「**大麦のパン五つと、魚二匹**」だけしかありませんでした。「大麦のパン」というのは、貧しい人のための安いパンです。また、ここでの「魚」という言葉は、調理した小さな魚を意味していて、干した魚、あるいは焼いた魚です。ですから「めざし」のような小さな魚だと思います。アンデレがイエス様のもとに持って来たのは、安いパン五つと、めざし二匹のような貧しい食べ物でした。アンデレは、持って来たのは良いけれど、五千人の群衆の前に、この貧しい食べ物はあまりにもちっぽけに思えて、「**それが何になるでしょう**」「何の役にも立たない」と言って、肩を落としてしまいます。

弟子たちは、イエス様から「信仰の試験」を受けました。しかしピリポは、お金がかかりすぎる、お金が足りないと諦めてしまいました。アンデレは、別の方法を考えて何とか「今あるもの」を集めましたが、集めたものの少なさ、貧しさを見て諦めてしまいました。

しかしイエス様は、アンデレが持って来た「今あるもの」を用いて、五千人の群衆にパンと魚を十分に与えられました。イエス様は「**彼らが望むだけ与えられ**」ました。彼らがお腹いっぱい食べても、「**十二のかご**」に余るほど豊かに与えられました。

イエス様と弟子たちは、非常に対照的です。弟子たちは、お金が足りない、「今あるもの」が少なすぎると足りないものばかりに目を向けていました。お金が足りない、パンが足りない、魚が足りないと。そして「今あるもの」では何もできない、何の役に立たない、自分たちは無力だと考えました。しかしイエス様は、11節にあるように「**パンを取り、感謝の祈りをささげて**」とあります。イエス様は、五つのパンと二匹の魚を「感謝」したのです。この貧しい食べ物を、何の役に立たないと嘆くのではなく、むしろ「感謝」されるのです。

私たちは、足りないものばかりに目が行きがちです。お金が足りない、人手が足りない、能力が足りないと。そしてこんなちっぽけな自分では何もできないと考えてしまいます。しかしイエス様は、決して五つのパンと二匹の魚を軽んじませんでした。イエス様は、五つのパンと二匹の魚を感謝されました。「今あるもの」を、「すでに与えられているもの」を感謝されました。私たちも、「足りないもの」にばかり目を向けるのではなく、「今あるもの」「すでに与えられているもの」にこそ目を向けなければなりません。そしてそれを、感謝するところから始めなければなりません。

しかし感謝するだけなら、「信仰」は必要ありません。イエス様は私たちに「信仰」を求めておられます。イエス様を信頼することを求めておられます。私たちは、自分たちが持つ

ているもの、与えられているものは、小さく貧しいものかもしれません。しかしそれを感謝して、イエス様にささげていく時、イエス様は尊く用いてくださるのではないのでしょうか。私には、五つのパンと二匹の魚しかありませんが、あとはイエス様にお任せします。イエス様、何とかお願いしますとお委ねする信仰が必要なのではないのでしょうか。

私たちの人生には、自分では抱えきれない大きな問題がしばしば起こります。問題の大きさに対して、自分のお金も能力も足りないということが起こるでしょう。しかし足りない所を見て何もしないのでは、私たちが「信仰」を持っている意味がありません。私たちはまず足りない所を見るのではなく、すでに与えられているもの、今持っているものに目を向けて、それを感謝することから始めなければなりません。そして足りない所は、イエス様に信頼して委ねていくしかありません。イエス様が必要を満たしてくださることを信じるしかありません。それこそ、イエス様が私たちに与える「信仰の試験」ではないのでしょうか。

教会にも同じことが言えます。教会の徒歩5分圏内には、約五千人の人が住んでいます。今日の聖書箇所の子供の数と同じくらいです。それに対して、私たちの教会は約二十人足らずです。私たちは、この五千人の人たちに対して何ができるでしょうか。足りないものを数え上げたらキリがありません。お金が足りない、働き手が足りない、賜物が足りない、若い人が足りないなど。しかし私たちは、五つのパンと二匹の魚だけで、五千人に十分なパンを食べさせたイエス様を信頼しなければなりません。私たちは、足りないものを数え上げて嘆くのではなく、すでに与えられているものに目を向けて、感謝をしなければなりません。私たちにすでに十分な賜物があります。イエス様がそれを用いるなら、五千人の必要を十分に満たすことさえできるのではないのでしょうか。大切なのは、私たちがそれを信じるかどうかです。イエス様は、私たちの教会にも「信仰の試験」をなさるのではないのでしょうか。

2. 余ったパン切れを集める弟子たち

イエス様は、人々が十分に食べた時、弟子たちにこう言われました。「**一つも無駄にならないように、余ったパン切れを集めなさい**」。イエス様は、群衆が望むだけ与えられました。それでもパンは余ったのです。イエス様には、群衆の必要を満たして余りあるほどの力があるということでしょう。イエス様はご自身が増やされたパンを一つも無駄にはされないのです。

イエス様は、パンを増やされる時、「感謝の祈り」をささげられました。イエス様は、聖餐式を制定される時にも、「感謝」をささげられます。「感謝する」という言葉は、ギリシア語の「ユーカリステオー」という言葉ですが、聖餐式にイエス様が「感謝」されたことから、聖餐式は「ユーカリスト」と呼ばれます。今日の聖書箇所は、イエス様が「感謝」をささげて、人々に「パン」を与えられることから、聖餐式のイメージと重なります。

私が神学校の学生だった頃、授業の中で「聖餐式で余ったパンとぶどうジュースをどう扱うべきか」というテーマでディスカッションがありました。ある人は、聖餐式で用いられたパンは聖なるものとされているから決して粗末に扱ってはならないと言いました。またある人は、パンはあくまでもパンだから捨ててもよいと言いました。ある教会の宣教師は、余

ったパンを犬のエサにしていたとか、ある教会では、子どもたちのおやつになっていたとかいう話も出ました。聖餐式で余った物は、伝統的に牧師が食べることになっているようです。さがみの教会でも、執事たちが余った物をまとめてくださり、私が食べることになっています。私は聖餐式で余った物を食べる時、その日礼拝に来られず聖餐式に与れなかった人たちを覚えながら食べています。その人たちに代わってというか、その人たちが来月は一緒に聖餐式に与れるようにと祈りを込めて食べるようにしています。また求道中の人を覚えることもあります。あの人やがてこのパンとぶどうジュースに与れるようにと祈りを込めて食べます。また地域の人を覚えることもあります。まだ見ぬ地域の人々がやがてこの聖餐式に与れるようにと祈りを込めます。

イエス様は、「一つも無駄にならないように、余ったパン切れを集めなさい」と言われます。聖餐式の余った物は、一つも無駄にしてはならないのだと思います。聖餐式のパンとぶどうジュースが一つも余らないほど、人々がたくさん礼拝に来られるようにしなければならぬと思うのです。聖餐式のパンとぶどうジュースは、イエス様が十字架で裂かれた体と、流された血を表します。私たちは、イエス様の体と血を決して無駄にしてはならないのだと思います。私たちは、イエス様が体を裂き、血を流してまで愛した人たちを、集めなければならぬのです。「一つも無駄にならないように」という言葉は、直訳すれば「一つも滅びないように」となります。この言葉は、有名なヨハネ 3：16 にも使われています。「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである**」。ここでの「一人として滅びることなく」というのが、今日の聖書箇所「一つも無駄にならないように」という言葉です。神様は、一人も滅びることなく、イエス様を信じて永遠のいのちを持ってほしいと願っておられます。そしてイエス様の裂かれた体と、流された血が一つも無駄にならないようにと願っておられるのではないのでしょうか。

余ったパン切れを集める働きを委ねられたのは、弟子たちでした。弟子たちはやがて教会を生み出します。その意味で、私たちの教会も余ったパン切れを集める働きを委ねられていると言えるのではないのでしょうか。余ったパン切れを集める働きとは、人々が一人も滅びないようにする働きです。イエス様の裂かれた体と、流された血を一つも無駄にしないようにする働きです。それはつまり宣教の働きと言えるでしょう。

弟子たちは、余ったパン切れを集めると「**十二のかごがいっぱいになった**」と 13 節にあります。「12」という数字は、聖書においては「神の民」を表します。旧約時代の神の民は、イスラエルの 12 部族でした。また新約時代の神の民は、12 使徒から生み出された教会です。いずれにしても、ここでの「12」という数字は、旧約と新約を貫く教会を意味すると考えられます。ここでは、余ったパン切れを集めると、12 のかごがいっぱいになったとあります。それは、教会はいっぱいになる、教会は満たされるという意味ではないのでしょうか。

教会の働きは、聖餐式のパンとぶどうジュースが一つも無駄にならないようにする働きです。教会はいっぱいになる、満たされるという約束を信じて、宣教に励んでいきましょう。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちはいつも足りないものばかりに目が向いてしまいます。目に見える現実ばかり見て、イエス様を信頼しません。クリスチャンであるにも拘らず、「信仰」を働かせることの少ないものです。どうかあなたがすでに与えてくださっているものにこそ目を向けて、まず感謝することができますように。今あるものをあなたにささげて、あなたに委ねていくことができますように。

また私たちは、イエス様から宣教の働きを委ねられています。12のかごにいっぱいになったように、教会はいっぱいになる、満たされると信じて、余ったパン切れを一つも無駄にすることのない働きができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。